

目次		ページ
第4回都市計画研究会	高井広行、杉恵頼寧	1
委託業務報告「市民による地区別まちづくり構想検討支援業務」について	松波龍一(総括)	3
	広島市8区の各報告	4~11
改正中心市街地活性化に基づく活性化事業研究会	宮本 茂	12
コラム 山口県の都市計画を振り返る2題	佐藤俊雄	13
会員紹介	安永洋一郎	15
今後の活動予定		16

第4回 都市計画研究会(2007年度)

テーマ：生活交通とまちづくり

日時：平成20年2月2日(土) 13:30~16:00

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

プログラム：

- ・講演1.福祉を考慮したこれからの生活交通とまちづくり
日本都市計画学会 中国四国支部 企画・研究委員長
近畿大学教授 高井 広行
- ・講演2.公共交通とまちづくり
日本都市計画学会 中国四国支部 支部長
広島大学名誉教授 杉恵 頼寧

主催：(社)日本都市計画学会 中国四国支部

共催：日本福祉のまちづくり学会 中国四国支部

参加者：37名

2007年度の都市計画研究会は、「公共空間活用の歩みと可能性・課題」をメインテーマに、これまで3回行われました。今回(第4回)は、来年度の研究テーマを導くことも意図し、「生活交通とまちづくり」と題して行われました。

講演1の概要：高井広行氏



日本では、今後50年間で、高齢化率23.41%、後期高齢化率11.27%と急激に高齢化が進展します。少子高齢化の生活交通やまちづくりに関する影響の内容とそれに対し都市サービスで対応していく必要性について、高井広行氏から東広島市を例に講演頂きました。

1 少子高齢化の生活交通やまちづくりへの影響

高齢者の移動を支える交通サービスの遅延

道路運送法の一部改正(閣議決定H18.2)により自家用自動車による有償旅客運送制度が創設され、交通空白輸送や市町村福祉輸送が可能となった。東広島市では運営協議会が設置され(県下で6市町)、地域に適した福祉有償輸送のあり方が協議されている。しかし、福祉有償輸送の認知度が不十分である等(65歳以上で、利用したことがある8%、内容を知っている14%)普及は十分でない。

高齢者事故の増大

東広島市では、交通事故死者数(人口10万人当たり)は、高齢者が12人と最も多い。高齢者の交通事故死者数の状態別では歩行中・自転車乗車中が64%と高い。今後、地域として高齢者の交通事故被害を軽減することが課題である。(現在、交通安全地域協働推進会議が広報・啓発や交通安全教育など活動中)

少子化による小中学校の統廃合

東広島市では、今後30年間で過小規模校(5学級以下)が増加し、統合が課題となっている(小学校37校へ)。

2 都市サービスでの対応の例

東広島市では、少子高齢化社会における生活交通の確保への対応の1つとして、中心拠点を連携し、都市をコンパクト化へと誘導するLRT(定時性に優れた中量公共輸送機関)導入が検討されている。

講演2の概要：杉恵頼寧 氏



バス交通の活性化と生活交通の確保に向けた様々な取り組みの可能性について、具体的事例も交え講演頂きました。

1.バスの特性とバスを取り巻く環境

バスには、固定費用はほとんど不要で、道路さえあればどこへでも行ける等の特性がある。道路輸送法が改正され、バスサービスの廃止や休止が簡単になったため、サービスの確保・維持が重要な課題になっている。

2.世界で新しいバス交通システムが誕生

デマンドバス(東急コーチバス:東京自由が丘)、基幹バス(名古屋市)、都市計画と連携したバス交通(ブラジル:クリチバ)等、新しいバス輸送システムが出てきている。

3.生活交通の確保と維持に期待

中国地方においても、コミュニティバス(さくらバス:廿日市市)、デマンドタクシー(だんだんタクシー:雲南市)等の取り組みがある。さらに、スクールバス・福祉バス等の多面的活用(集約化・一元化)、旅客と貨物の複合輸送(ポストバス:イギリス)、行政・教育・医療・福祉・福祉等各施設の集中配置(きらめき広場:岡山県新見市)のような中山間地域における生活交通の確保の具体例もあり、今後も多様な取り組みが期待される。

意見交換

1.地域ニーズに応じた対策が重要

バリアフリー化に関しては、従来、乗降客数 5000 人/日の駅が対象となっていたが、新法では、行政が認めた場合は乗降客数によらず取組める。住民の声を大きくし行政に働きかけることが重要である。

2.バスの構造的改善が望まれる

車イスの固定に時間を要したり、日本のバスでは床が一部しか低くなかったりするため、バスの構造的改善も必要である。メーカーもバリアフリー化に向けた基準作りに参画しており、この面からの改善も期待される。

3.住民によるバスサービスの確保

中山間地だけでなく、広島市内の団地でもバスサービスの確保が課題となる場合があり、これに対しては、ダイヤモンド機能を有するコミュニティバスが有効と考えられる。公共交通の確保・維持では、キーパーソンを中心とした住民の熱意が最も重要である(境市で、通学の足を確保するため、「1人1駅運動」が展開された好例もある)。



会場の様子

<感想>

生活交通の確保は、身近で切実な問題になってきている。今年の研究会では、お互いが触発され、現地に即した処方箋を見つけるきっかけになることを期待いたします。

(文責 木田川 誠司)

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』 について

運営に参加された会員のみなさん、ご苦労さまでした。

1. はじめに

平成19年度に都市計画学会が広島市から受託した標記業務に、全体責任者としてかかわった立場から、作業を振り返って若干のコメントをしておきたい。この業務の中心的内容であった「地区別まちづくりワークショップ(以下“WS”と略記)の企画・運営」に関して、今回のWSの特徴と今後の展開方向などについての感想を記す。

2. 今回のWSの規模

WS全体は、広島市全域を対象とする必要から、8区で各4回、合計32回の開催回数、延べテーブル数は170卓に及んだ。各テーブルの進行を担当したテーブルマスターとその補助者、各回の全体進行担当者、受付担当者などをあわせると、当日スタッフだけで延べ300名近くに達したと思われる。公募市民の参加者数は、延べ1100余名であった(なお、全体の記録はとりまとめ中であるので、人数等についてはいまのところ正確な数字ではない)。

趣旨を同じくするWSを、一斉に、このように大規模に開催したということが、まず今回のWSの大きな特徴であったといえる。このことは意外と本質的であって、それが、目標とする成果の見通しや進め方の設計に大きな影響を与えた。

進めるにあたっては、予想される混乱を避けるために調整の機会を多くもった。委員会、世話人会のほか、各区の担当者が集まるワーキング会議を5回、模擬WSを2回開催し、事務局による綿密な「地区別WSの手引き」は、バージョンアップしながら3回発行されている。このことによって、結果的に運営参加者の間の協働が促進され、交流が進んだことは、支部活動の活性化により効果をもたらしたと思う。

3. 目標とした成果と結果

このWSの目的は、広島市総合計画の改訂にあたり「公募市民による共通のWS形式で地区別まちづくり構想を検討し、基本計画の一部である『区の計画』に反映させる」ことにあった。この「反映させる」という表現が微妙であるために、地区別の「まちづくり構想」がどんな形をとればよいか、しっかりと見定めておく必要があった。

「区の計画」は、総合計画の一部として市民に合意され、政策的な整合性もある程度吟味された行政計画として調製されるべきものである。WSの成果として作成された地区別の「まちづくり構想」をつなぎ合わせればできる、というものではない。その理由は当然ながら、まず、WSの参加者は市民の有志であって、代表とはいえないから、その成果は合意の手続きを経ていない。また、市民WSに政策的な整合性の評価まで求めるには無理がある

つまり、「まちづくり構想」は「区の計画」のサブセットを目指すものではない。そこで、今回のWSでは、整理された計画を立案するというよりも、「区の計画」に盛り込むための取り組みアイデアをできるだけたくさん列挙する、ということに主眼をおいた。

実際にWSを通して、住民の目から見たアイデアが、小さなものから大きなものまで大量に提案され、「区の計画」のための貴重なライブラリーとなった。その意味では、大きな成功を収めたといえる。

4. 今後の課題

WSの4回目のプログラムで実施した「プロジェクトの組み立て」は、その作業過程を通して具体的な取り組みに向けての意欲を高める意図をもっていたが、「プロジェクト」の意味についての理解が浸透しなかったために、必ずしも期待した成果があがったとはいえない。今後の課題であろう。

また、参加者の集め方についても課題が残ったといえる。どの会場でも「いつものメンバー」が目立ったという印象がある。日頃から参加度の高い市民が集まったこと自体は悪いことではないが、日頃隠れた意見を聞く機会となりにくかったとすれば、やや残念である。より個別的・具体的なテーマの設定、一般マスコミの活用など、次はさらに工夫したい。

このほかに今回の試みを通して、スタッフの側から多くのコメント(改善要求など)が得られている。WSの技術を高めていくために、これも貴重な財産となった。

5. 今後の展開方向

3回目のWSで列挙された、まちづくりの取り組みアイデアと、4回目で整理されたプロジェクト(その段階でアイデアが若干補充されている)は、それ自体が貴重なデータである。

今後は、個別のプログラムのやりがいとフィジビリティを高めるためのWSをぜひ継続したい。そうでなければ、いかにも勿体ない。しかし、その作業は「総合計画の改訂」という枠組みからはずれる可能性が高く、行政側からフォローしにくい。このことは「計画策定」と銘打って実施したWSの成果が、えてして宙に浮いてしまう原因ともなっている。今後、地区を限定した形でもよいから、丁寧な対応が望まれる所以である。

その一方で、今回の成果を総合計画に反映させるために必要なことは、次の2点と思われる。

個々の取り組みアイデアについて、行政計画として採用すべきか否か、という取捨選択の判断を行うこと。

計画全体としての整合性や戦略性を考えたうえでの組み立てを行うこと(ここでは、全市的なバランスという視点もはいる)

これらの作業には、もはやWSにはなじまない内容も含まれる。今回のWSで得られた成果をいかすためにも、責任の所在や専門家の関与のしかたをはっきりさせながら、今後の反映作業を進めていただきたい。

(文責 松波龍一・松波計画事務所)

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』

- 広島市中区の報告 -

広島市区别魅力づくり事業への提案・反映を目的として、平成19年11月～20年3月に、計4回実施した、ワークショップの報告である。会場は中区役所又は中区地域福祉センターで、参加人数は、各回18～26名であった。

中区は、鞆町、国泰寺、吉島、江波の4地区から構成されている。

1. 鞆町地区 / 第1回のみ2テーブル、その後1テーブル
当地区は、県庁、広島城、縮景園などの観光資源、基町アパート等の公営住宅、寺町など、市を代表する資源が集まる中心部であり、提案が期待された。

困っている点や困りそうなことでは、歩行しづらい道路や空間、公園などの汚さ、景観、基町アパート問題など比較的身近な問題が指摘された。将来困りそうなことでも、人口減少、高齢化、コミュニティ不足、医療・子育てなど、昼間人口が多いものの、ソフトな課題が指摘されている。

よく知られた宝、埋もれた宝では、広島城、縮景園、雁木、市電に加えて、大本営跡、帝国議会跡、工兵橋など、江戸時代、戦争縁の歴史資源が特に多くなっている。きめ細かな歴史資源の発掘が期待されている。

自分たちでやりたいことは、子連れの人達の交流の場、環境学習・平和学習、子どもたちへの声掛け、高齢者の外出支援など、生活に密着した内容が多く挙げられている。最終的には、「クリーン・グリーン」作戦、大人も子どもも笑える地域づくり、広島まち物語をつくろう等のプロジェクトが、提案された。景観、歴史、コミュニティに重点がおかれている。

2. 国泰寺地区 / 全回ともに1テーブル

当地区は、市を代表するビジネス街、歓楽街、広島市役所などを有する市中心部であり、昼間人口が多い地区であり、どのような市民協働が提案されるか注目された。

困っている点では、コミュニティの問題(意識差・薄さ)、交通の問題(駐車場、駐輪場規制表示)、道路環境の問題(歩道、街灯、電柱地中化)など、ここでも比較的身近な問題が指摘された。将来困りそうなことでは、中心市街地商店街衰退、空き家など、中四国を代表する都心部とは考えられない課題が指摘されている。他に、水害の危険性、支店の撤退、高齢者による老人ケアなど外部からでは気づかない問題も指摘されている。

よく知られた宝、埋もれた宝では、原爆ドーム、百米道路、桜並木に加えて、廣大跡地、大手町史跡、頼山陽資料館、西平和大橋など、歴史的資源や遊休施設が挙げられているのが特徴である。



自分たちでやりたいことは、子どもが水遊びできる場所づくり、元安川での水泳大会、落書き消し、公園整備、掃除・花壇、子どもたちの見守り活動など、地域の資源を活用した身近な内容が多く挙げられている。最終的には、大手町筋(白神組) 国泰寺夜のにぎわい再生、都心の水と緑でコミュニティの再生プロジェクトが、提案された。歴史、にぎわい、コミュニティに重点がおかれている。

3. 吉島地区 / 全回ともに1テーブル

平和公園を擁する1地区1島から成っている。国内を代表する資源や住宅地から形成されている。

困っている点や困りそうなことでは、霞庚午線の交通問題、吉島東の通学路の安全性、若者のたまり場など、将来困りそうなことでは、マンション増加に伴うコミュニティの問題、公共交通機関の弱さ、組織の高齢化等が指摘されている。道路やマンション開発に伴う問題と高齢化などに伴う衰退の両面での課題が指摘されている。

よく知られた宝、埋もれた宝では、河岸の桜、中工場、あいさつロード、清掃をしているグループ、いきいきサロンなど、平和公園などは少なく、逆に地域活動に積極的な人的資源が多く挙げられている。

自分たちでやりたいことは、環境のまち・吉島づくり、河岸の活用、案内板、海に関する名称・歴史の活用など、川・海に関するもの、環境・エコに関する内容が多く挙げられている。最終的には、かもめ、オーシャンブルー、なかよしエコ、平和公園ようきんさつた、ご近所の底力プロジェクトなど、海、エコ、コミュニティ、観光客向け事業が多い。

4. 江波地区 / 全回ともに1テーブル

困っている点や困りそうなことでは、カラス問題、空き店舗、事務所、公園利用、将来困りそうなことでは、南道路に伴うコミュニティ分断、高齢化などが指摘されている。

よく知られた宝、埋もれた宝では、江波山公園の桜、漕ぎ伝馬をはじめ、地元でしか知らないような資源が多く挙げられている特徴である。自分たちでやりたいことは、公民館での講習会、地域でのあいさつなどが挙げられている。

最終的には、漁村そして未来の歴史・文化、元気なまち・子どもづくり、あいさつプロジェクトなどが提案された。

5. 今後に向けて

都心区でありながら比較的身近で、ソフトで具体的な提案が多かったと考えられる。今後につなげていきたい。



(文責 宮本茂 (社)中国地方総合研究センター)

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』

- 東区の報告 -



東区案内図(広島市HPより)

ワークショップ(WS)への参加者

東区WSの参加者は、当初応募が少なく、第1回開催予定を2週間延期し、再募集した。その結果65名の応募があり、4地区で最大7班(当日出席者数で調整)の構成となった。参加者の特徴として、女性が過半数を占めたが、これは、担当課長が女性だったことによると聞いている。また、区内に大学が2校あり、女子大生の参加も得られた。

東区の特徴

東区は、広島駅の新幹線口に接しているが、総じて平地が少なく山間地が多い。駅前には、中国地方最大の国有遊休地があり、これから大きく変わる可能性を有するとともに、広島市唯一の国宝建造物である不動院金堂や、市街地のバックスクリーン(青垣山)となっている双葉山や牛田山など、歴史と自然に恵まれた区でもある。



【各地区の特徴(WSの主な意見より)】

地区	困ったこと・もの	宝
福木・温品地区	交通規制(時間規制)生活施設の不備、高齢化	森林公園、散策コース、見晴らし、農産物
戸坂地区	道路の混雑、公園の不足、施設の老朽化	太田川、西山・東山、神社、郷土芸能
牛田・早稲田地区	急傾斜地対策の不備、狭隘道路、集会施設がない	太田川、不動院、被爆樹木、大学等の集積
二葉地区	道路の不足、自然破壊の進行、生活環境の悪化	歴史の散歩道、双葉山からの夜景、巨木

私たちの提案(プロジェクト)の紹介

4回のWSを通じて、各地区で3つ程度のプロジェクトが提案された。ここではその一部を紹介する。

【WSで提案されたプロジェクトの一部】

歴史文化再発掘プロジェクト(福木・温品地区)

史跡や里山などの地域資源に恵まれている中で、それらの価値を十分認識し、活かしたまちづくりをすすめるため、地域に根ざした公民館、幼稚園、小学校、関係団体等が核となって、歴史・文化・自然を再発掘していく。

「ふるさとへさか」の宝発見・育成プロジェクト(戸坂地区)

へさかの特徴である歴史遺産を活用し、神社や遺跡・芸能を中心にまちづくりを推進する。(神社PRJ・遺跡PRJ・歩くPRJ・芸能PRJなどを連携して推進)

住民・官司が核となって進めていく。

水と緑(しじみとたけのこ)のプロジェクト

(牛田・早稲田地区)

山・川の保全を目的として、自然体験・学習型のイベントを行い、その成果が、山の幸、海の幸となって地域に返ってくることで、持続可能なプロジェクトとして成長・発展いく。

「東区みどりのボランティア」を核として活動を推進する。

ふたばの郷プロジェクト(二葉地区)

「歴史の散歩道」を広島の観光の核として情報発信することで、ここをフィールドに多くのボランティアと行政が協力しながら、ハードの整備と併せて、もてなしのための仕組みづくりや組織づくり、みやげ物づくりなどを推進する。



WSの成果(私たちの提案)



WSの風景

まとめ

今回は、8区(8社)の協働・協調型のWSであり、事前にマニュアルをしっかりと準備し、取り組んだ。おそらく、その結果として各区ほぼ共通の成果が得られてものと考えられる。しかし、第一回のテーマが、困ったこと・もので、しかも「だからこうしたい・こうして欲しい」とは言わせないという運用であったため、参加者の一部で強い不満の声が上がった。幸い、2回目以降、テーマが進行するにつれて徐々にWSらしい雰囲気になり、テーブルマスターの努力もあり、協働作業が進められた。また、参加者からWSに関する情報公開等の要請があり、広島市もその準備を進めていると聞いている。このWS成果が、広島市の総合計画に反映されることを期待するとともに、区及び市のまちづくりに関わるコミュニケーションの活性化の一助となれば幸いである。

(文責:佐伯達郎 復建調査設計(株))

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』

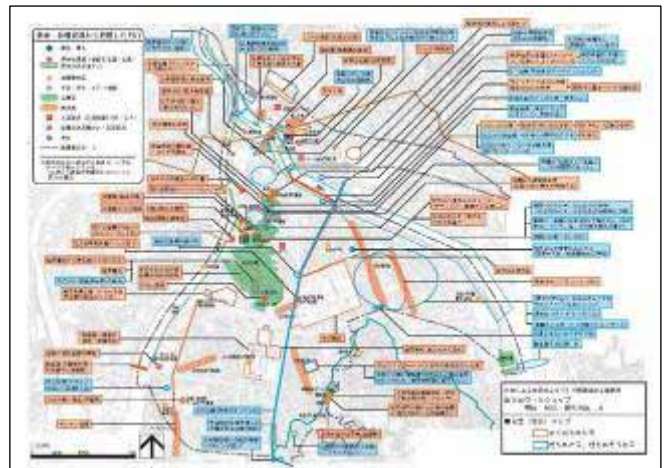
- 南区の報告 -

1. ワークショップの実施概要

南区でのワークショップは、区内を4つに分け、『大州地区』と『宇品・似島地区』がそれぞれ1テーブル、『段原・翠町地区』と『仁保・楠那地区』がそれぞれ2テーブルの計6テーブル(第4回は各地区1テーブルの計4テーブル)で行いました。

開催日程と参加者の実績は下表のとおりで、各回概ね25名程度の参加者がありました。

	開催日	参加者数				
		大州	段原・翠町	仁保・楠那	宇品・似島	計
第1回	H19.11.18(日)	4	9	9	5	27
第2回	H19.12.01(土)	4	7	7	6	24
第3回	H20.01.26(土)	4	4	9	6	23
第4回	H20.03.01(土)	3	8	8	6	25
合計		15	28	33	23	99
参加登録者数 (平均の参加率)		6 (63%)	11 (64%)	13 (63%)	7 (82%)	37 (67%)



[1テーブルで出された100以上にものぼるお宝マップ(成果図)]

一方、こんなにも多くの宝があることにうれしさを感じるとともに、今後のまちづくりのネタが豊富にあることに大きな期待を抱いたところです。(しかしながら、筆者の不勉強さを棚に上げた上で言うと、“キラリと光る資源があるのに関わらず、あまり知られていない”という現状から、その情報発信力の低さに課題があるかもしれません。)

また、意見出しされた「宝」は、総じて歴史・文化的な背景を有するものが多く、参加者の“残したい・伝えたい”という欲求の高さと、それを上手く実践できる環境が整っていないことへの不満や不安を感じました。

《ビジョンを求める住民の声》

一般的にワークショップで出される意見は、身近なことや、即地的なこと、現実的・具体的なことなどが多いものですが、宇品・似島地区では、終始一貫して、まちづくりビジョンの策定が上げられました。



[テーブル討議の成果を発表する様子]

当該地区は、まちづくり活動の素地があることと、近年、新築マンションが集中的に立地し、まちの姿が急変しつつある中で、新旧融合への渴望と不安などに起因して、ビジョンづくりへのニーズが高まったものと思われます。

このように、ビジョンの策定段階からのまちづくりへの参画を強く求める住民の姿勢は、これからの地域自治の進展を強く予感させられました。

3. ワークショップの反省など

反省点は少なからずありますが…一つは、参加者の性別・年齢構成に偏りがあった(男性が多く、若年層が少ない)ことにより、意見の多様性と世代間の違いが把握できたか疑問が残る点、もう一つは、盛り沢山のメニューのため参加者の皆さんが消化不良気味になった感がある点です。

最後になりましたが、本委託業務を遂行するに当たって尽力されましたワーキンググループ、世話人会、事務局の皆様には感謝と敬意を表します。

(文責：高田禮榮 中電技術コンサルタント株)

2. 参加者の皆さんから出された意見など

《全体として…》

参加者の皆さんからは、広島港や海岸線、黄金山・比治山、猿猴川・京橋川、国道2号、広島駅、また、現在建設中の新球場などを南区における都市の骨格として捉え、これらにまつわる意見や提案が多数出されました。

第1回から第4回までを区全体で大きく括ってみると、“安全・安心”“高齢化”“コミュニティ”“活性化”といった分類において、様々な問題点や改善策等が上げられています。これは現在、どこでも上がる一般的なキーワードかもしれませんが、ここ政令市である広島(南区)においても例外ではなく、これらのキーワードにおいて、インフラ整備の充実と、イキイキとした生活を営むための住民自治の体制づくりが求められています。



《驚いたことは…》 [地図を広げてのテーブル討議の様子]

第2回ワークショップでは、「これが宝だ!」をテーマに、“よく知られた宝”と“埋もれた宝・埋もれそうな宝”について意見出しを行いました。

南区に本社を置く建設コンサルタントに所属し、南区に住まいを構える一住民でもあった筆者が、いみじくも南区を担当したわけですが、“私の身近に知らない宝がこんなにも多くあったのか!”と驚かされるとともに、不勉強さを反省したところです。

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』

- 西区の報告 -

1. ワークショップの実施概要

西区でのワークショップは、区内を4つに分け、「中広地区」、「観音地区」および「己斐・己斐上地区」がそれぞれ1テーブル、『古田・庚午・井口台・井口地区』が2テーブルの計5テーブル(第4回は各地区1テーブルの計4テーブル)で行いました。

開催日程と参加者の実績は下表のとおりで、各回概ね30名程度の参加者がありました。

	開催日	参加者数				
		中広	観音	己斐・己斐上	古田・庚午・井口台・井口	計
第1回	H19.11.18(日)	8	3	7	9	27
第2回	H19.12.09(日)	7	7	8	12	34
第3回	H20.01.27(日)	9	6	7	14	36
第4回	H20.03.02(日)	8	6	6	7	27
合計		32	22	28	42	124
参加登録者数 (平均の参加率)		10 (80%)	11 (56%)	10 (70%)	22 (48%)	53 (58%)

2. 参加者の皆さんから出された意見など

参加者の皆さんからは、まちづくりに関する課題として以下の意見が多く出されました。

コミュニティの機能低下への対応(町内会活動の停滞、連携不足、高齢化、若者の都会流出)
モラルの向上(あいさつ、マナー、美化・清掃活動)
安全対策の実施(防犯パトロール、一家一点灯運動)
地域らしさの強調(魅力を生かしたイベント開催)
まちづくりの担い手づくり
教育の崩壊への対応(道徳、しつけ、社会ルール)
子ども会の活発化
活動組織、情報、資源のネットワーク化
地域の歴史、文化の継承・案内

これらは“西区ならではの”というよりは、世の中全体に対する意見でもあると思えるのですが、これらをふまえた取組みとして、第4回ワークショップ「わたしたちの提案～地区の特性を活かした魅力づくり計画～」で個性あふれるプロジェクトが誕生しました。



[地図を広げてのテーブル討議の様子]

「提案された代表的なプロジェクト」

《提案された代表的なプロジェクト》

中広地区では「西区遊食プロジェクト」という太田川放水路で取れる川の幸、三滝山でとれる山の幸を「食」し、合わせて太田川放水路でスポーツイベント「遊」を開催するというものが提案されました。また、活動の推進方法として、ボランティアとしてではなく「株老人クラブ」を立

ち上げて行うというユニークなアイデアも出されました。

観音地区では、種々の活動をまとめる組織・場をつくり既存施設(眠った施設)を有効に利用するための仕組みづくりとして「眠れる箱を開けプロジェクト」という、一風変わった名前のもので提案されました。観音地区には特有の施設(西飛行場、マリナーホップ、観音マリナー、総合グラウンド等)が多く存在するため、うまく活用する仕組みができると、地区内外の活性化につながることを期待できます。

己斐・己斐上地区では、己斐出身の作者が描いている「ズッコケ三人組」が多く取り上げられ、これをテーマとして己斐全体のまちづくりを行う「ズッコケ三人組のふるさと己斐プロジェクト」が提案されました。ここでは3プロジェクトが提案されましたが、その統括ネームが「ルネッサンス己斐」とされ、己斐地区にかける参加者の熱い思いが伝わってきました。



[テーブル討議の成果]

古田・庚午・井口台・井口地区は、新旧が入り組んだ地区であり、西国街道沿いの文化財や地域の伝統(神楽、盆踊り、とんど等)が多く存在することから、「歴史文化継承プロジェクト」が提案されました。

《活動のきっかけの場としてのワークショップ》

第4回ワークショップでは会場全体から意見を出してもらう機会があり、「この人がいなかったら解決しなかった」というような意見が出る等、活発な意見交換がなされました。ワークショップに参加する人の中には町内会や各活動に参加されている方も多く、ワークショップをきっかけとして、情報交換や活動の連携機会が増えることによって、西区全体や広島市全体へと展開していければいいと感じました。



[意見交換会の様子]

3. ワークショップを通して

「まちづくりにおける次世代の担い手の発掘・育成」という意見が出されたように、今回のワークショップでは若年層の参加が少なかったことが残念です。埋もれそうな宝が本当に埋もれてしまう前に、引き継ぐ環境づくりを整えなければならぬと感じました。

最後になりましたが、本委託業務を遂行するに当たって尽力されましたワーキンググループ、世話人会、事務局の皆様には感謝と敬意を表します。

(文責：加藤文教 (株)ヒロコン)

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』
- 安佐南区の報告 -

1. 実施体制(4地区、6テーブル)の概要

8区横並びの企画、とりまとめのスタイルで、果たして区ごとに特徴的成果は得られるだろうか?

結果として、55名の参加者、市・区役所職員によって企画に命が吹き込まれ、安佐南区ならではの課題、対応、アイデア、プロジェクトにまとめられたと思う。

私たち自身が住むまちで、じっくりと地域を見、考え、参加者と成果を紡ぎ出すという、良い経験を得た。

当社のメンバーは各テーブル担当の6名(金子、加澤、梶、梁瀬、竹野、門田)と全体進行の私、目山。支援メンバーとして戸根、谷川が適宜参加させていただいた。後半2回は、高井先生(近畿大教授)、今田先生(呉大学教授)に加わっていただき、安古市、沼田の各地区のテーブルマスターとしてご苦労いただいた。

実施体制の整理

地区名	参加者	テーブル数	スタッフ		支援者
			市・区	福山C	
佐東地区	11人	1	1	1	-
安古市地区	18人	2	2	2	高井広行 (近畿大学)
祇園地区	15人	2	3	2	-
沼田地区	11人	1	1	1	今田寛典 (呉大学)
計	55人	6	7	6	2

参加者数は登録者数。テーブル数は最大時。

2. 各地区の総括

各地区で提案された魅力づくりプロジェクトを□内に示した。各地区での議論を通じて感じたことを簡単にコメントする。

(1) 佐東地区(担当:金子俊之)

- ・緑井駅前サロン拠点づくりプロジェクト
- ・古川ホテルの里と桜並木づくりプロジェクト
- ・安佐南区おいしい「食」づくりプロジェクト

いま、開発の槌音のする佐東地区では、これからの拠点づくりと、地域資産の活用に着目したプロジェクトの提案として、検討成果が結実した。

(2) 安古市地区(担当:梶敏弘、加澤敦)

- ・明るい地域づくりプロジェクト
- ・後世に残したいプロジェクト
- ・みんなが参加プロジェクト
- ・みんなの生活道プロジェクト
- ・川で遊ぼうプロジェクト

基盤の成り立ちが異なる部分(坂のまちと、畦畔・土堤の入りくんだまち)同士が、ひとつの地区としてまちづくりの方向性を探った点が興味深いものであった。「(生活)道路」に着目したプロジェクトが提案された。

(3) 祇園地区(担当:梁瀬一平、竹野剛)

- ・地域資料を活かしたイベントプロジェクト
- ・環境保全プロジェクト
- ・祇園地区安全・安心まちづくりプロジェクト
- ・祇園交通結節点プロジェクト

祇園では、国道54号沿線で東西交通軸線の強化を求める意見が多くみられた。高齢化により地域が変貌しようとしている部分と、春日野のように人口増で小学校などの都市施設の不足が課題となっている部分とが併存しており、市民参加の促進や、見守り隊など市民の自発的な取組みとの連携がプロジェクトとして提案された。

(4) 沼田地区(担当:門田裕二)

- ・高齢者支援(仕組づくり)プロジェクト
- ・食と農の空間活用(地産地消)プロジェクト
- ・高速4号線活用プロジェクト
- ・文化のまちづくりプロジェクト
- ・環境にやさしいまちづくりプロジェクト

大きく分けて、新興住宅地(伴)と田園地域(戸山)の二つに分けられる沼田地区では、それぞれのエリアに対応するかたちで、課題と対応が論じられた。

今回、伴と戸山をひとつの地区として検討してきたが、両者を独立した地区として、伴地区、戸山地区という区分で検討することも、今後の課題としたい。

3. 各地区での議論を振り返って(総括:目山直樹)

安佐南区でのWSで出された意見の中から、トピックとして以下の3点をあげ、総括にかえたい。

(1) 「川のまち」のまちづくり

区内に、太田川、安川、古川が流れていることから、川や河川敷空間との関わりを強く意識されており、管理主体が異なることや管理水準の違いに対する問題意識が現れ、住民が主体的に活動するために、窓口の一元化を求める声があった。

(2) 旧町を単位とする地区のまとめ

地区単位での議論が具体的で、市民の能動的な取り組み(例えば地域見守り隊、緑井のサロン等)に、これまでの経緯と歴史的な結びつきの強さを感じさせられた。

(3) 大学のあるまちづくり

今回のWSで、広島経済大学等の学生が数人参加されており、中高年の年齢層に偏りがちなこのような会を、和やかに盛り上げた。広島市立大学、広島修道大学など、区内に大学があることを活かした大学、大学生と連携したまちづくりが期待できる。

区民から出されたアイデアで特筆されるものとして、以下を紹介して筆を置きたい。

アサミナミシュラン(安佐南区の産品やお店などの顕彰。ネーミングがよい。)

区の花 (8区に通じる考えといえる)

広島南アルプス(武田山、火山を含む山岳レクリエーションコース)

【謝辞】参加されたみなさん、ならびに同労者(市・区職員、他社コンサルタント、大学関係等)の各位に、敬意と感謝を申し上げます。また、このような機会を与えてくださった日本都市計画学会 中国四国支部関係各位に御礼申し上げる次第である。

(文責 目山直樹・株福山コンサルタント)

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』 - 安佐北区ワークショップの報告 -

1. 実施状況

8区のなかで最大の81名(白木地区18名、高陽地区22名、可部地区18名、安佐地区23名)の市民に参加していただき、第1回から各地区2テーブル(計8テーブル)で開催することとなった。

そのため、担当コンサルタントだけでの人的配置が難しく、事務局コンサルタントや大学の先生(篠部裕先生、坂本淳二先生)、市・区職員などの多くの協力を得ながらの運営となった。



2. 地区の特徴と提案

広島市の面積の約39%を占める安佐北区は、広域にわたり、多様な意見が出された。可部地区、高陽地区では、主に道路、公共交通の問題などが多く指摘され、白木地区、安佐地区では、集落の高齢化によるコミュニティの維持や休耕田の増加、自然災害の問題などが多く指摘された。

第1回の「困ったこと・困ったもの」で出された意見が、第2回の「これが宝だ」においても資源として出されるなど、マイナス面とプラスに変えていこうという積極的な意見も出された(例えば、可部線廃線跡、休耕田など)。

第1回から第4回までに多くの意見が積みあがり、各地区で3~5つのプロジェクトが提案された。

白木地区の提案

農業と生活が成り立つことが、里山を守り、コミュニティの維持につながり、全てのプロジェクトを連携して進めることが必要。



わたしたちの提案(白木地区)
・白木コミュニティづくりプロジェクト
・農業の元気づくりプロジェクト
・里山づくりプロジェクト
・大河原廃河川敷プロジェクト
・三篠川水域の保全・活用プロジェクト

高陽地区の提案

プロジェクトを通じて、地域の活動や魅力を情報発信することと、子ども達も参加しうるプロジェクトを立ち上げることが重要。



わたしたちの提案(高陽地区)
・地域の絆プロジェクト
・高陽きれいプロジェクト
・魅力発見プロジェクト
・いきいきプロジェクト
・あんしん・あんぜんプロジェクト

可部地区の提案

これまでの取組み・事業を住民活動につなげるプロジェクトを立ち上げることで、可部地区が活性化し、安佐北区の発展につながる。



わたしたちの提案(可部地区)
・水と緑のてくてく歩きプロジェクト
・その時可部は動くプロジェクト
・地域の宝・子そだてプロジェクト
・みんなで参加ふれあいプロジェクト
・可部にぎわいプロジェクト

安佐地区の提案

地域の課題が多岐にわたるため、1つの方向に解決策をまとめることは難しいが、特に、地域活動への参加に関する仕組みづくりが重要。



わたしたちの提案(安佐地区)
・お宝活用と人を呼びこむプロジェクト
・地域力を高めようプロジェクト
・生活の安全・安心プロジェクト

3. WS運営の工夫点・反省点

8テーブルを運営するにあたって、特に配慮したことは次の2つであり、テーブルマスター、サポーターの多大な協力があり、成功することができた。

多くの主体が関わったこともあり、事前の統一的な進行の周知や資料提供などの細かいやりとりに配慮した。

多くの参加者から平等に意見を出していただけるように、グループワークにおける意見発表や全体発表の時間厳守を参加者に周知するよう配慮した。

しかしながら、参加者の性別、年齢に偏りがあったことや、最終的にテーブルマスターの技量に頼らざるを得なかったことは、反省すべき点としてあげられる。特に、第4回で地区ごとのプロジェクトをまとめる際には、参加者が20名程度の地区もあり、十分な議論がされないまま、プロジェクトとしてまとめる状況にあったことは否めない。



4. 感想・まとめ

今回のWSを通じて、参加者のまちづくりに対する意識が高いことに感心し、次の段階として、具体的に進めるための支援が求められる。

都市計画学会としては、今回の取組みは、学会員のネットワークが、1つの目的に向かってパートナーシップを組んで取り組めたことに、大きな意義があったと思う。

(文責 石村壽浩・ランドブレイン株式会社)

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』

- 安芸区の報告 -

1 業務の実施体制

安芸区での業務(ワークショップ)は、(株)地域計画工房が担当し、テーブルマスターとして石丸紀興広島国際大学教授、橋本清勇広島国際大学准教授、前田真子広島工業大学講師、サポーターとして広島市の職員及び前記2大学の学生の皆さんの参加を得て、進めることができました。

運営に当たる全体マスター、テーブルマスター、サポーターは、年齢のバリエーションあり、男女共同参画の観点ありで、これまでにない体制を組むことができ、4回で終わらすにはもったいないといえます。

2 業務の流れ

ワークショップは、瀬野川、船越、阿戸、矢野の4地区で行い、さらに参加人数によっては、地区を2つのグループ(テーブル)に分けました。2007年11月17日(土)の第1回を皮切りに、4回のワークショップを行い、回を重ねるごとに参加者が増え、延べ123人の市民の参加を得ることができました。その概要は、下記ようになります。

<ワークショップの概要>

第1回ワークショップ
困ったこと 困ったもの
2007年11月17日(土) 14:00~16:20
参加者数: 25名(応募者45名中)

第2回ワークショップ
これが宝だ
2007年12月8日(土) 14:00~16:30
参加者数: 29名(応募者52名中)

第3回ワークショップ
こんなことしたい あんなことしよう
2008年1月19日(土) 14:00~16:30
参加者数: 31名(応募者55名中)

第4回ワークショップ
私たちの提案
2008年3月1日(土) 14:00~16:50
参加者数: 38名(応募者58名中)

ワークショップの開催風景



3 プロジェクトの提案

第4回のワークショップでは、これまでの3回を踏まえて、4つの地区ごとにプロジェクトの提案をまとめました。

プロジェクトを構成する個別のメニューは多種多様で、他で使いたくなるキーワードもありました。

安芸区のプロジェクト一覧

瀬野川	1) 地域振興プロジェクト 2) 明るいまちづくりプロジェクト 3) 自然を楽しむプロジェクト
船越	1) 船越を伝えるプロジェクト(船越の魅力づくり) 2) 素晴しいまちづくりプロジェクト 3) 助け合いのまちづくりプロジェクト 4) 安全・安心のまちづくりプロジェクト 5) 快適な環境づくりプロジェクト
阿戸	1) @WATERプロジェクト 2) Healing Villageプロジェクト
矢野	1) 山から海へのつながりプロジェクト(縦軸PJ) 2) 人との関わりを広げるプロジェクト(横軸PJ) 3) 人との触れ合いプロジェクト(網の目PJ)



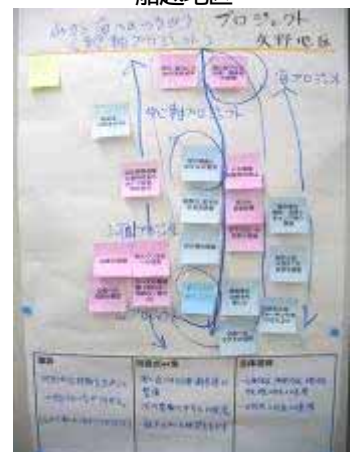
瀬野川地区



船越地区



阿戸地区



矢野地区

4 雑感

8つの区で、よくまとめ上げることが出来たな、というのが実感です。また、マニュアルの作成、ファシリテーター等の体験と育成など、得るものは大きかったと思います。

一方、安芸区での体験からは、運営におけるアドリブの大切さや、ワークショップの提案とプランナーの役割、職能などについて考えさせられました。

(文責: 山下和也・(株)地域計画工房)

委託業務の報告

『市民による地区別まちづくり構想検討支援業務』

- 佐伯区の報告 -

平成17年に旧湯来町が編入され、これまでの佐伯区にはなかった豊かな自然や温泉などの新たな魅力が増えました。

反面、生活やコミュニティなどの面での地域格差が表面化しにくくなるなど、これからのまちづくりに向けて新たな課題も生まれています。

佐伯区では平成12年度以降、区の魅力づくりを推進していくために、「緑のネットワーク事業」、「ふるさと文庫事業」、「まちづくりふれあい楽校事業」、「まごころネットワーク事業」などの魅力づくり事業が継続的に展開され、区民にもその効果が認識されつつあります。

今回の地区別まちづくりワークショップには、こうした魅力づくり事業の活動に参加している市民スタッフも参加し、これまでの取り組みの発展や新たな取り組みの創造など佐伯区の魅力を高める様々なプロジェクトが提案されました。

以下に、佐伯区でのWSの結果概要を報告します。

1. 実施状況

佐伯区での地区別参加人数は、以下の通りです。

市民参加者数(人)

地区名	第1回	第2回	第3回	第4回	地区計
湯来	6	8	9	6	29
河内	7	8	7	6	28
石内・八幡・観音	14	16	12	14	56
五日市	10	8	11	7	36
合計	37	40	39	33	149



熱心なグループワーク



グループ発表の様子

2. 地区別の提案プロジェクト

以下に示すように、地区別に2~3のプロジェクトが提案されました。

(1) 湯来地区

魅力の情報源泉プロジェクト

・ブロードバンドゼロ地域の解消と情報の受発信機能の強化を目指し、観光ビジネスの活性化を図る。



魅力大発見プロジェクト

・地域の資源(こんにやく、四本杉、温泉、狐原山、水内川、ホテル、神楽、石ヶ谷峡、竹下桜など)を利用して、魅力を再発掘する。

住みよいふるさとプロジェクト

・道路、交通等の整備、ゴミ対策などによる住環境の整備・向上と若者が住み良い環境づくり。

(2) 河内地区

河の内(かわのうち)再生プロジェクト

・川(八幡川とその支流)を中心に河内のまちを再生する。

みんなでつくろう地域交流(ドライブ)プロジェクト

・地域コミュニティを活かし、3地区(河内、彩が丘、藤の木)相互の地域交流を進める。



(3) 石内・八幡・観音地区

こもれびと穂多璫(杵)の里づくり

・人と自然の共存した田園の魅力づくりを行い、次世代に受け継ぐ

おとなりさんネットワーク

・区民自身が楽しめる、安心・安全な洒落たまちづくりを目指し、様々なコミュニティの課題を解する。

(4) 五日市地区

佐伯区みちめぐり風土記づくり

・眠っている地域資源を活かし、文化と歴史の輝くまちをつくる。

安心安全で心豊かなまちづくり

・地域をつなぐ公共交通ネットワークと大人も子供も安心して暮らせるまちをつくる。

公共空間を活用したコミュニティづくり

・みんなが使うきれいな公共空間づくりにより、地域コミュニティの活性化を図る。



参加者の多くは、自らが取り組むことを前提に考え、実現性の高いプロジェクトが数多く見られました。自分たちの提案したプロジェクトが実現化していくことへの期待感がストレートに伝わってくるほどの熱き思いに押され、スタッフも額に汗掻く場面もみられましたが、4回のワークショップをなんとか無事に終えることが出来ました。

ご支援いただいたスタッフ及び関係者の皆様には、この場をお借りしてお礼申し上げます。

(文責 長谷山 弘志・荒谷建設コンサルタント)

研究会の報告

『改正中心市街地活性化法に基づく活性化事業研究会 - 山口市、府中市の事例』

平成18年5月、中心市街地活性化法等が改正された後、中心市街地活性化計画認定は全国23市(当時)中国地方3市であり、そのうち中国地方の2市をお招きし、研究会を開催した。3回目となる今回は、日本建築学会中国支部(都市計画委員会)主催、日本都市計画学会中国四国支部他後援で、平成20年1月12日、広島市内で開催された。参加者は行政、大学、コンサルタント、ゼネコン、商店街担当者など25人。

1. 事例報告 / 山口県山口市

山口市中心市街地活性化推進室 石川氏、清水氏

平成11年に旧法に基づく中心市街地活性化基本計画を策定していたが、今回、法改正に伴い、平成19年5月に策定。旧基本計画の成果としては、統計上のデータに一定の成果がみられる点、官民協働して取組体制ができ、さまざまな活動が行われた点、都市福利施設の集積、利便の向上が図られた点が挙げられる。逆に、反省すべき点としては、成果指標の設定をしておらず、因果関係が不明確である点、合意形成を得られず、実現したものが少ない点、郊外大規模店の立地を制限することができず、取組の効果が十分発揮できなかった点が挙げられる。また、中心市街地が旧に比べて面積を狭くしている点、準工業地域において大規模集客施設(床面積1万㎡以上)の立地を制限していることが特徴である。

新しい取組として、山口市中心市街地活性化協議会(会長:山口商工会議所会頭、構成員:(株)街づくり山口他22団体、平成18年9月)の設立や、庁内推進体制として、「中心市街地活性化推進室」(平成18年4月)が設置されている。

計画は、「自然と文化の薫るまち」、「にぎわいのあるまち」、「暮らしやすいまち」など、山口市の持つ文化性を前面に出しているのが特徴で、また成果指標として、商店街通行量、小売業年間商品販売額、居住人口を、平成18-23年で掲げている。

主要事業は、総合・循環型福祉サービス推進モデル事業、子育て支援者のための支援拠点施設運営事業「てとと」、どうもんパーク事業、市民活動支援センター「さぼらんて」、一の坂川周辺地区整備事業、市営住宅整備事業、ほっとさろん中市「まちのえき」事業などである。



2. 事例報告2 / 広島県府中市

府中市建設部まちづくり課 日野氏、浅野氏

府中市が抱える課題として、昭和45年以降、一貫して人口減少傾向、高齢化が進展していること、人口減少率(平成12-17年)は県内14市中、3番目に低い水準であること、事業所数、従業者数、出荷額ともに製造業が衰退傾向であること、特に製造品出荷額は平成9-17年に約37%減少していること、土地利用では、低密なDIDが広がっていることなどが挙げられる。

府中市のまちづくりの6大課題として、都市計画道路など実現できない都市計画の存在、拡散した非効率な市街地、都市基盤と都市機能の不足、住・工・農が混在する無秩序な市街地、中心市街地の空洞化と生活機能の衰退、まちの魅力・うるおい・美しさの欠如となっている。

このため、新基本計画では「府中市版コンパクトシティ」を目指し、「身の丈にあったまちづくり」、「計画的なまちの縮小と都市の高度化」を基本的な方針としている。

主要事業では、「恋しき」の保存・再生、観光交流センター(仮称)整備、石州街道・出口地区街なみ環境整備、統合小中学校「府中学園」整備、チャレンジショップ、府中焼きフェスタ(仮称)、産業観光、JR府中駅周辺整備などとなっている。



3. 意見交換

山口市の取組に対して、成果指標の目標値の設定方法、中心市街地から湯田温泉が除外された経緯、商店街の活性化・方針をどのように考えているかの議論があった。

府中市の取組に対して、JR福塩線をまたぐ南北道路の整備の可能性、具体的な「恋しき」(元老舗旅館)の保存活用法などが指摘された。

他に、そもそも中心市街地は、なぜ活性化が必要か、活性化の中身はどう捉えるべきかといった意見も出された。ソフトな施策、例えばリーダー育成等の事業メニューの可否について指摘された。

講師からは、中心市街地は歴史と顔であり、文化性が必要。また、基本計画では5年間での成果が必須、その中で民間事業に期待せざるを得ない。地区や事業を絞り込まざるを得ない。小さなリーダーは育てている面もある、今後に期待したい、などである。

人口、機能が縮小する都市構造の中で、計画・誘導を模索している現場の状況が理解できたことが大きな成果で、次の研究会での取組を期待したい。

(文責 宮本茂 (社)中国地方総合研究センター)



コラム：山口県の都市計画を振り返る2題**(社)中国地方総合研究センター 佐藤俊雄**

本年2月にわが家に1冊の冊子が送られてきた。「山口県地域経済の将来構図」という冊子であり、著者は安部一成氏である。経済学者である氏は、山口県の地域開発の権威であるだけでなく、中国地方や全国的にも委員会などを通じて幅広く活躍してこられている。



私は山口県出身ということもあって、先生の知遇を得て、20代の後半から10数年間は、山口県下の地域開発の現場に委員の一人として係わるとともに、研究者のネットワークである(社)地域発展計画研究者機構(以下、機構)による自由な議論の場に参加してきた。機構の活動は近年はやや低調になっているとはいえ、氏は旺盛なバイタリティをもって新たな地域開発のテーマに挑戦されておられるようである。

今回の著作は、氏が関与された多くの具体的なテーマを取り上げて総括されたというよりも、その根底にある山口県下の経済学上のテーマを抽出して、学者としての分析と将来展望を示されたものである。

私は氏がこの著作に注がれた多くの時間と集中力に大いに敬意を表するものであるが、この著作に刺激されたことにより、ここでは私自身が係わった都市計画的なテーマについて振り返ってみたい。

中心商業地の再構築、あるいは中心地性の再構築

およそ20年以上も前に委員の一人として参加したときから、私が最も多く体験したテーマが中心商業地の再構築である。多くは商工会議所や商工会が事務局となった委員会であったため、市街地の活性化という都市計画的な視点というよりも、商業拠点づくりや近代化をどう進めるかということがより重要なテーマであった。当時は大規模小売店舗法(関係者は大店法と呼んでいたが、今は死語になっているのではなからうか)による大型店規制が行われていたが、既に小都市では郊外店舗に押され、商店街は衰退傾向が見られていた。

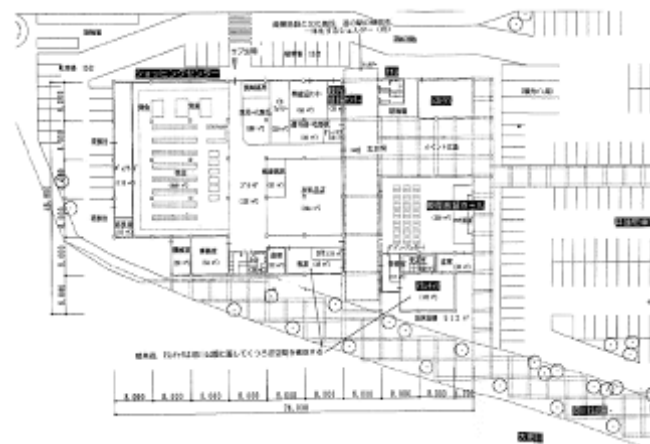
その当時の論点は、流通からの視点による商業近代化論と、都市計画の視点からの中心市街地形成論をどうバラ

スさせるかということであった。そして、流通論からは集客力を持った核店舗形成が最も効果的な近代化の処方箋として提示されており、2核1モールなどの店舗計画論が示されていた。

集積のメリットを大型店舗という形態で追求するために、当然郊外立地となり、中心商店街の商店主たちとは利害が衝突する。近代化理論のバイブルのような本には、郊外大型店の建設により中心商店街は壊滅状態となるが、次の段階で壊滅状態の中から中心商業地を再構築する旨の理論がかかれており、その実現性の真偽はともかく、大胆な発想に驚いた覚えがある。

当時は、中心商店街の店主には共同で近代化する力が乏しく、大店法に守られて郊外大型店の規模削減などの条件闘争をしているという構図が確かにみられはしたが、当時の建設省の本省の方までもが流通近代化論に傾斜した発言をされることもあり、中心市街地の重要性にこだわっていた私は孤立感を味わい、中心市街地形成論と商業近代化論の間で大いに迷ったことを記憶している。

ともかく、私自身が参加したプロジェクトでは、多くの場合共同店舗づくりがテーマであったが、店主や行政の方々と議論をしながら、共同店舗を中心市街地に誘導するように努力した。行政の方は中心市街地論に理解を示される場合が多かったが、商業プランナーは収益が上がるかどうかだけを重視されるので、衝突することが多かった。幾つかは計画倒れになったが、2件が実現した。いずれも小都市であるが、1件は商業者のリーダーシップに牽引されて中心市街地に隣接した区画整理事業というインフラを基盤としたものであり、もう1件は幹線道路や河川公園というインフラを活かしたものであり、こちらは行政のリーダーシップに支えられて実現したと受け止めている。



(注)私自身が関与して実現した事業の計画平面図、敷地レイアウトでは駐車場と店舗との関係性や河川公園の提案等が実現、建築では文化機能との融合を意図したが実現しなかったものの、商業空間としての1核2モールの提案等は概ね実現

ちなみに、広島西風新都の計画過程では、交通拠点を中心として都市機能を集約すべしという伝統的な中心地形成論に対して、そのような伝統的考え方は尊重するものの民間投資を誘導するだけのツールがないため、郊外立地傾向を見せる民間投資を対象としてそこをサブ拠点として位置づける、

という市場経済尊重型の中心地形成論が併記されたように記憶している。

90年代になり、大店法は段階的に緩和され、90年代末についに廃止された。この大店法の廃止をもって、経済産業省では国の政策の転換点と捉えているようだが、私はむしろ90年代初頭の大店法緩和こそが転換点であったと捉えている。それは、大規模商業施設の店舗展開を定量的に把握した結果に基づくものである。

さて現在、中心市街地活性化法も改定され、同時に改正された都市計画法により郊外大型店が大きく抑制される政策になったが、それをどれだけ追い風にして中心商業地の再構築を図ることができるのか、私は懐疑的にならざるを得ない。

ほとんど絶望的な状況の中で、80年代の郊外核店舗形成のバイブルが喝破したように、徹底した疲弊の後にこそ大胆な失地回復プロジェクトが生み出されるのかもしれないという感も抱いていたところだが、最近の中心市街地活性化計画を見ると、歴史文化資源を活かした地域資源磨きというアプローチが目立ち始めてきている。確かにそういうテーマでないと攻め口が見つかりにくいのも事実であるが、小さな賑わいは生まれても中心地性の再構築への道筋は多難である。あるいは、多くの人々が郊外商業空間に飽きて、路地的な魅力を持つ中心市街地に回帰傾向を見せるほど、高齢化と併行して人々の意識の成熟化が進展するのだろうか。

中核都市形成をいかに進めるか

安部先生の著書の中で、提起されているテーマのうち、私にとっても最も関心を引いたのが中核都市形成というテーマであった。周知のごとく、山口県は分散型の都市構造であり、最大の都市である下関市が九州側に偏って配置され、20万人前後の複数の都市が分散配置された形になっている。大都市のような過密が無い代わりに、文化的なイベントに乏しく、商業界隈性が無く、帰宅途中の同僚との飲食コミュニケーションという雰囲気にも欠けている。工業化社会の時代はこれでも大きな問題はないが、サービス経済化に突入した80年代、さらには知識経済社会の時代に入っている90年代の経済環境の中で、集積力に乏しい地域構造の下で、どのように成長戦略を構築するかということ、機構の研究会でも数度にわたって議論してきた。

90年前後であったかと思うが、安部先生に頼まれて一つの図を作成した。それは、当時の徳山、防府、山口、宇部、萩などを取り込んだ大きな輪であり、東端の岩国は広島の大輪へ、西端の下関は福岡の大輪に包含されるような構図であったかと思う。それまで、山口県下の中核都市論は、山口都市圏、宇部都市圏、周南都市圏などを並列的に議論していたのだが、その3つを一体的に捉えた点が斬新であった。当時私自身も、小規模にまとめた中核都市論を言ってもどうにもならないと思い始めており、山口都市圏と宇部都

市圏の連携発展軸を研究会の場では提言したりしていた。県庁と空港、2つの山口大学(山口市と宇部市に配置)という突出してハイレベルな資源を統合した新しい都市軸形成が可能ではないか、という主張であった。

安部先生の提案は更にそれを上げたものであり、氏はこのたびの著書の中で「メガ経済都市圏」というネーミングをされておられる。実は、氏が提案された後、山口県総合計画(1998年)において、その輪が「広域活力創造圏」という概念図で表現されているのを見つけ、軽い興奮を感じるようになった。氏の提案との因果関係については確認はしていないが、長年8つの都市圏構造を唱っていた県の計画としては、大胆な第一歩になっているのではないかとと思われる。



(資料)やまぐち未来デザイン21(1998/山口県)より

今後、具体的な都市連携をどうすすめるかという戦略や施策が目目されるが、各論の一つとして注目しているプロジェクトが新山口駅の近代化を図るターミナルパーク構想である。

近年、駅を中心とした知的交流拠点形成や集客拠点化が進んでいるように思われる。東京駅周辺ではサテライトキャンパスが続々誕生しているし、京都駅では行政が大学の交流拠点を作っているし、動き始めた大阪の梅田駅のヤード開発では、知的・創造の場というのがコンセプトとなっているようだ。中国圏でも、岡山駅は行政とJRの連携投資により、南北を連絡して駅の拠点性を高め、広島駅はこれから駅北と駅南での再開発が幾つか計画されており、特に駅北の開発は道州制時代の高次都市機能拠点的な位置づけを持つべき位置にあると思う。

H20.2.29 付けの日経新聞で藤田昌久氏が提案されておられるように、異なる「固有知識」の交流の中から創造活動が営まれるということであれば、山口メガ経済都市圏においては、新山口駅の交通拠点性をうまく活用することが重要であろう。即ち、都市圏内の資源の集中度に着目するのではなく、県外の知的資源との結合を意識した交流拠点型の計画論である。新山口駅でも、大内文化や芸術文化としての萩焼等の香りが感じられるような知的創造交流空間が創出されれば、内外の知的創造者の興味を惹きつけるかもしれないと期待しているところである。

会員紹介

安永 洋一郎(やすなが よういちろう)

パシフィックコンサルタンツ(株)中国支社

- ・技術部長兼入札室長
- ・技術士【総合技術監理部門(建設 - 都市及び地方計画)、建設部門(都市及び地方計画)】

生い立ち

1952年(昭和27年)生まれ / 山口県玖珂町出身(平成の合併後、岩国市) / 岩国高校卒、広島大学工学部土木工学科卒業 / 広島大学大学院工学研究科修士課程修了 / 東京 大阪 長崎 大阪 広島と転勤し、広島在住9年目

広島との関わり

縁あって、次の2つの広島市の業務に、受注者として関わりを持たせて戴きました。いわゆる計画屋として「ものができる喜び」をそこを訪れる度に感謝し感じています。

比治山芸術公園基本構想

大学時代の測量実習の場でもあった比治山のスカイラインを乱さない、壊さないというコンセプトのもと、現代美術館、青空図書館(現在はまんが図書館)、展望広場などが尾根に貼りつくかたちで整備されています。青空図書館は計画当時、本を屋外に持ち出し蝉の声を聞きながら読書するという都会の喧騒から隔絶された世界がイメージされています。

広島駅表口広場概略設計

現在の広島駅表口の駅前広場です。路面電車の軌道を、当時ドイツから購入された車輻が長いドルトムント電車を収容できるよう計画されました。このことが現在のLRT車輻導入を容易にしたとも思われます。また、地下通路の最大幅員は30m程度ありますが、当初は広すぎるのではという意見もありましたが、今とってみればゆとりある歩行空間が形成されているのではないのでしょうか。

現在、そしてこれからの活動

パシコン(当社の略称)は本社が東京にあり拠点が東京・大阪で広島は少人数での体制となっています。私も都市計画、交通計画、公園設計など間口を広げて広島・東京・大阪・九州のメンバーとの協働と広島の独立されている方々との協働によりなんとか業務をこなしています。広島にもどってきて8年が経過しましたが、その間、下関市、尾道市、岩国市、福山市の総合計画や都市計画の業務に携わることができました。それぞれの都市のまちづくりの課題や方向性は様々であり、何度もその地域を訪れ、思考を蓄積しなければ、物語は語れないという思いを強く抱いています。

今後も、都市計画学会の皆さんの力を借りながら、広島を中心として地域に根ざした民間プランナーとして活動してゆきたいと考えています。



比治山芸術公園の青空図書館をバックに



今後の活動計画

都市計画サロン

日時 2008年4月19日(土) 16:00~17:30
 場所 コンフォートホテル広島 2階会議室
 広島県広島市中区小町3-17
 講演者 青山吉隆(広島工業大学教授)
 題目 交通と持続可能なまちづくり

2008年度・第6回通常総会・研究発表会

日時 2008年5月10日(土) 10:00~18:00
 場所 ホテル法華クラブ広島 10階会議室
 広島県広島市中区中町7-7

【プログラム】

特別講演会 10:00~12:00
 招待論文:被爆建物を通じた都市の記憶と構造に関する一考察:山下和也(株式会社地域計画工房)
 招待論文:低炭素型社会に向けた都市構造づくりを考える:谷口 守(岡山大学)

総会 13:40~14:20

研究発表会 14:30~18:00

中山間地域における活動パターンに関する基礎的分析:嶋本寛(広島大学)他
 都心居住を考慮した都市施設の配置評価モデルとその適用:近藤光男(徳島大学)他
 中山間地域の生活利便性評価と居住継続意向に関する基礎分析:塚井誠人(広島大学)他
 郊外居住者の抱くまちなかイメージとまちなか居住意向:高塚創(香川大学)
 徳島都市圏における世帯の空間分布予測モデルの開発:渡辺公次郎(徳島大学)他
 まちづくりのための自己申告調査システムの提案と評価:張峻屹(広島大学)
 考えるプロセスを重視した「公共事業における景観配慮」:秋月裕子(株式会社 オオバ)他
 都市計画学会中国四国リレーションポジウム第1回「水辺の景観・活用・治水」を終えて:熊谷昌彦(米子工専)他
 ベトナムにおける「道の駅」の導入可能性:岡英紀(広島大学)他
 広島市学校モビリティマネジメントの取り組みと効果:三木登土也(広島市)他

懇親会 18:10~20:00

ホテル法華クラブ広島1階レストラン:会費5,000円

第6回通常総会資料は、4月下旬に事務局よりお送りします。

支部連携行事「公共空間とまちづくり」

(1) 松山市

テーマ 坂の上の雲まちづくりと都市景観整備(仮題)
 日時 6月14日(土) 14時ころ~17時ころ
 場所 子規記念博物館 2階会議室
 (松山市道後公園 1-30、Tel:089-931-5566、市内電車「道後公園前」または「道後温泉駅」下車徒歩5分)

【プログラム】

基調講演
 松本啓治(坂の上の雲まちづくり担当部長)
 パネルディスカッション
 パネリスト:松山市道後地区整備担当者、松山市道後フアサード整備担当者、道後温泉誇れるまちづくり関係者(ホテル) 支部関係者
 コーディネーター:柏谷増男(愛媛大学教授)
 現地見学

(2) 宇部市または山口市

開催予定時期:平成20年秋

特別講演会

日時 2008年7月
 場所 広島市内
 講演者 近藤光男(徳島大学教授)

編集後記

満開の桜も葉桜へと姿を変え、いよいよ新年度が本格的に始動しました。新入職員も迎え入れ、デスクの配置も新たに、この時期の職場にはどこか新しい風が流れているような気がします。

ところでこのニュースレターでは、創刊当時から支部活動を支えてきていただいた隅田誠氏が、この度、仕事のご都合で編集委員を卒業されることになりました。惜別の念は尽きませんが、同氏の今後の益々のご活躍を祈念するとともに、これまでのニュースレター発行に多大なご精励をいただいたことに、心より感謝いたします。

さて、新年度の支部活動も4月19日(土)に開催される青山吉隆先生(広島工業大学)の都市計画サロンを皮切りにスタートします。このニュースレターでは、会員の皆様のご協力のもと多彩な企画でホットな情報を紹介していきたいと思っておりますので、引き続きご愛顧いただければと思います。

(周藤 浩司)

編集委員:周藤浩司(編集長)、佐伯達郎、佐藤俊雄、高田禮榮、長谷山弘志、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也